

## 大学生個別指導塾講師が経験する中学生への心理的かわり

—塾講師の心の動きを通した居場所としての塾の考察—

川原 祥子

### I 問題

#### 1. 居場所

「居場所」という言葉は本来「居る場所」つまり「いるところ、いどころ」という意味を持つ言葉であるが、現在では物理的な空間を指し示すだけでなく心理的な意味をも表すようになり、非常に多くの場面で使用されるようになった。特に文部省が1992年に不登校に関する報告書（文部省初等中等教育局，1992）を出し、学校が「心の居場所」の役割を果たす必要性を提唱して以降、心理的な意味をもった居場所という言葉が広く用いられるようになり、現在では一般的に快感情を伴う場所、時間、人間関係等を指して用いられているといえる。

教育臨床や心理臨床の領域では、他者との関係の中で、個人が「ありのままにられる」ことと「役に立っていると思える」こと、つまりは他者との関係に対する意味づけを居場所の心理的条件としているといえ、その居場所の獲得が、アイデンティティの危機に直面している青年期の発達において、重要な意味を持つと考えられる。

#### 2. 中学生にとっての居場所

小田・上村（2007）は児童期から青年期への移行期である中学生はアイデンティティの発達に伴い、自己との関係のみならず他者との関係も不安定になりやすく、対人関係において戸惑いや混乱が生じやすいため、対人関係を居場所と捉えにくくなっているのではないかと考え、このような時期には、他者との関係を築き直していく作業を安心して行える場や環境が必要だと述べた。

#### 3. 居場所としての塾

石本・齊藤（2006）は中学生の生活が居場所感にあたえる影響について、塾や他の習い事に通っている生徒は、学校外で友人をつくる機会を得ることができ、クラスや学校での同調の圧力にさらされない楽な友人関係を作ることができると指摘し、学校の外に友人を作ることによってクラス内の友人関係だけに執着する必要がなくなり、クラス内の友人関係では適度な距離を保つことができるようになると推測して

いる。そして、塾や習い事は学力の向上や技術の習得といった本来の面だけでなく、狭くなりがちな中学生の友人関係にとって、緩衝地帯としての役割を有しているとも推測している。

鈴木（2020）は、塾には「子どもの居場所機能」があるとし、具体的には塾講師がいじめや進学などの問題について子どもの悩みを聞くことを挙げ、加えて「友達を作る場」になることもあると述べている。さらに、近年では「子どもの居場所」のような生徒にとっての機能だけでなく、保護者にとっての機能もまた注目されており、保護者や子どもの「能力不安解消機能」も学習塾の主要な機能として考慮されるべきとしている。

以上のように中学生にとって、塾が家庭及び学校外の居場所として、または、発達において大きな影響を与える場としての重要性について多くの示唆がなされているものの、なぜ塾がそのような場として機能しているのか、塾内での対人交流がどのような性質のものなのかについては明らかにされていない。

### II 目的

本研究では個別指導塾講師として中学生に関わる大学生アルバイトの心の動きに焦点を当て、塾講師の語りを通してどのようにして塾が中学生の居場所に繋がっているのかについての仮説を見出すことを目的とした。

### III 方法

調査期間：2021年10月～11月

研究協力者：中学生に対し個別指導塾にて講師をしている大学生12名に対しインタビューを行った。

調査方法：半構造化面接を行い、インタビューガイドに基づいて60分程度実施した。

インタビューガイド：

- ①「生徒とかかわる時に大切にしていることは何ですか。」
- ②「生徒とかかわる時に気を付けていることは何ですか。」
- ③「生徒と勉強以外でのかかわりはどのようなものがありますか。」

④「勉強以外のかかわりで大変だったことを教えてください。」

分析方法：調査で得られたデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにて分析した。

#### IV 結果・考察

分析の結果、個別指導塾講師として中学生に関わる大学生の心の動きに関する 8 のカテゴリーと 25 の概念が生成され、生成された概念とカテゴリーを用いて個別指導塾講師として中学生に関わる大学生の心の動きに関するストーリーラインを生成した。ここではカテゴリーを<>、概念を【】で示す。

その結果、大学生が塾講師としてアルバイトに従事することの最終的な目的である金銭を得る過程に起こる【講師としての成果】や【自分の関わりに対する自信】が個別指導塾講師として生徒である中学生に関わる大学生にとって<報酬>の役割を果たし、その<報酬>を得る上で中学生と安定した関係をつくり授業をするための【信頼獲得のための接近行為】、【学習以外の情報収集】という<関係づくり>が存在する。<報酬>と<関係づくり>の関係は個別指導塾講師として中学生に関わる大学生の心の動きの中核に位置しているといえる。<関係づくり>の過程には【関わりの自問自答】をするなどの<試行錯誤>、生徒が多感な時期であると捉えて【生徒を慮る】、【生徒の言動に敏感になる】、【自分と生徒を重ねる】などといった<多感さへの不安>が惹起していると思われる。また、<多感さへの不安>や<試行錯誤>をしながら起こる感情を<セルフコントロール>し、生徒にとって<聞き役としての話し相手>となり<関係づくり>を行う。これらの動きには潜在的に「自分は塾講師だから」と思いながら関わる<塾講師という自認>が影響を与えていると思われる。

以上で説明した動きの副産物として個別指導塾講師として大学生が中学生に関わる際に、講師の意図しないところでナナメの関係を生み出しており、このナナメの関係が中学生に居心地の良さを感じさせ、塾での居場所感を与えていると考えられる。

また、ナナメの関係を含めた一連の動きには個別指導塾講師として働く大学生アルバイトという立場の不安定さに対する葛藤が潜在的に影響を与えており、その葛藤自体が講師のモチベーションにつながっている可能性が考えられた。

#### V 総合考察

本研究では大学生個別指導塾講師の語りを通して、講師が葛藤を抱えながらも一生懸命に中学生と関わり関係を作ろうとする心の動きそのものがナナメの関係を生み出し、その関係が中学生にとっての居心地の良さを生んでいるのではないかという仮説が生成された。

本研究の臨床心理学的意義として、中学生という時期は居場所に対し物理的な面ではなく心理的な面で意味を感じていると考えられ、集団指導塾ではなく個別指導塾で講師と一対一で一定期間関わりながら、関係をつくる過程で居場所感を感じることは、中学生の心身にとって有益であると思われる。また、本研究の結果から個別指導塾で大学生が中学生に関わる際に戸惑いや葛藤を抱えていることが示唆された。中学生と心理的関わりをもつ塾講師に対するコンサルテーションという形での心理支援につなげていくことができるかもしれない。

本研究の限界および課題として、3点挙げる。1点目は今回研究協力者を募集してインタビュー調査を行ったため、研究協力者はある程度塾講師という仕事にモチベーションを持つ者が多くなった。したがって、インタビューデータの質に偏りがあった可能性がある。2点目は今回調査依頼をしたのが1社のみということである。塾には様々な企業があり、それぞれが独自の方針を持って指導している。そのため、本研究で得た結果を一般化することは難しいかもしれない。3点目は、本研究は個別指導塾講師として中学生に関わる大学生の視点から考察を行ったため、関わりの方向が一方向であり中学生と塾講師の心理的な「交流」の考察まで至らなかった。

#### 【引用文献】

- 石本雄真・齊藤誠一（2006） 中学生の生活が居場所感にあたる影響について 神戸大学発達科学部研究紀要, 14, 129-130, 131-132.
- 文部省初等中等教育局（1992） 学校不適応対策調査研究協力者会議 登校拒否（不登校）問題について：児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して
- 小田佳代子・上村恵津子（2007） 居場所の捉え方とその発達の変化 日本教育心理学会 第49回総会発表論文集, 536.
- 鈴木繁聡（2020） 学習塾研究の特徴と課題 東京大学大学院教育学研究紀要, 60, 270, 273, 274.